

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「チュルク諸語における膠着性の諸相－音韻・形態統語・意味の統合的研究－」

(第1回研究会)

日時：平成29年7月22日(土) 14:00-18:00

場所：AA研304号室

報告者：佐藤久美子(国立国語研究所)

(1) 佐藤久美子 (AA研共同研究員・国立国語研究所)

「プロジェクト全体の説明」

申請書に基づいて、本研究課題の概要・目標・成果物・年次計画について説明した。

(2) 江畑冬生 (AA研共同研究員・新潟大学)

「サハ語・トゥバ語研究から見たチュルク諸語研究の諸問題」

本発表では、チュルク諸語研究の諸問題を概観した。その際、文法現象や文法形式が単に存在するか否かだけではなく、形態音韻の交替の有無、文法形式の生産性や義務性、ある文法形式がカバーする意味的範囲など、表面的な記述だけでは判断できない側面に注目した。本発表ではアクセント・形態音韻法・派生形態法・形態統語法に関して、チュルク諸語が示す類型的相違点とありうるタイプを示した。結果として、同系のチュルク諸語における文法規則や文法形式の機能が、言語ごとに異なっていることを示した。

(3) 日高晋介 (AA研共同研究員・東京外国語大学)

「ウズベク語の形動詞・動名詞－定動詞・副動詞と比較して」

本発表では、ウズベク語の形動詞・動名詞各々の統語的機能について、定動詞と副動詞と比較しながら議論した。特に次の二点を明らかにした：1. 形動詞が単に動詞が形動詞化したものなのかという点、2. それらがどのような規則によって使い分けられているのかという点。

以下、上記二点の問題に答える。1. ウズベク語の全ての形動詞は形容詞の機能が付加されたものとは言えない(しかし、過去 *-gan* は頻度も高く、形容詞の統語機能全てを持つため、動詞が形容詞化したとすることができよう)。2. 第一の規則として、補文節・副詞節において主節後行事態を表す際には、非過去 *-digan* が用いられず、動名詞が用いられる(しかし、この規則は共時的に説明ができない)。第二の規則として、時を表す節の述語あるいは連体修飾節述語において、一回的で *actual* な動作であるという読みが薄れると、動名詞も選択できる。

(4) 佐藤久美子 (AA研共同研究員・国立国語研究所)

「文頭・文末イントネーションの機能について－トルコ語と日本語の比較－」

イントネーションは、文タイプの区別、意味的焦点の表示、話者の発話態度の表出など、様々な機能を持っている。本発表では、特に、イントネーションと文タイプとの相互関係に注目し、トル

コ語と日本語の比較を行った。トルコ語では、文頭のイントネーションが文タイプの区別をしているという主張と、文末のイントネーションが文タイプの区別をしているという主張がある。それらの詳細を述べたのち、いずれの主張にも解決すべき問題点あることを指摘した。そして、東京方言を含むいくつかの方言との比較を通じて、問題解決のための可能性を探った。その中で、トルコ語の文頭のイントネーションは、文タイプの区別ではなく、文中の意味的焦点を表示する機能があるという分析案を提示した。

22名の参加者が、それぞれが専門とする言語・分野の見地からコメントを述べ、活発な議論が行われた。